

# は　じ　め　に

和歌山大学教育学部附属小学校長　松　浦　善　満

いま、どの学校でも授業研究と校内研修に日々取り組まれていることと思います。本校でもこの2年間、「意味と内容」が広がる学習の創造をテーマに授業研究と校内研修に取り組んできました。その成果は昨年、10月28日の研究発表大会である程度発揮されたと思います。

500名以上にのぼる県内外の参加者の少なくない方から、「いい授業を参観させていただいた」、「記念講演は今後の学校改革に参考になるものだった」との感想をいただきました。私たちは、この賛辞を励みにいっそう実践研究に打ち込んでいこうとしていますが、本研究誌はそのための各教員の日ごろの実践の総括であり到達点でもあります。

いま私たち教師は、単なる教える専門家 (Teaching profession) としてだけでなく、学習の専門家 (Learning profession) としての飛躍が求められているのですが、そのためにはお互いの授業実践を反省・省察し、子どもたちの学びが響きあい、学習が成立している条件は何かを発見し検証していかなければなりません。

そこには、授業における教師の「教育的タクト」がうまく機能しているか、発問や教材の質が子どもの学習意欲を高めるものとして用意されているか。さらにクラスの雰囲気は親和的で安心して発言できる風土に形成されているか、など等さまざまな条件が考えられます。

佐藤学氏は、研修会では授業者への「助言」や「批判」ではなく、観察者として「学んだこと」を各自が発言すべきだと指摘していますが、その意見に私も同感するものです。本誌に記載された実践研究論文は、先生方の授業実践の真摯な省察であります。同時に校内研で、あるいは各地の研究会に参加し学年や教科枠を越えて学んできた研究成果の一端です。

ぜひご批判、ご批評いただき皆様方の学校や研究機関で活用していただけますよう心からお願い申し上げます。

2006年3月